

高まる“戦争の危機”を阻止する大運動を！

12月8日、宮澤弘幸の墓前に集う



今年10月23日から11月1日まで、台湾有事での中国と米国での武力衝突を想定した自衛隊と米軍の日米共同統合実働演習（キーン・ソード）が沖縄など南西諸島を中心に本土でも展開された。これに先立ち、集団的自衛権行使容認閣議決定（2014）、特定秘密保護法（2014年）、安保関連法制（2015年）、共謀罪法（2017年）、重要土地利用規制法（2022年）安保3文書閣議決定（2022年）と、戦争への道と国民弾圧法制が施行されてきた。安保3文書に基づく防衛予算は5年間で43.5兆円とGDP比2%とすることが決定されている。“戦争前夜”ではないか。

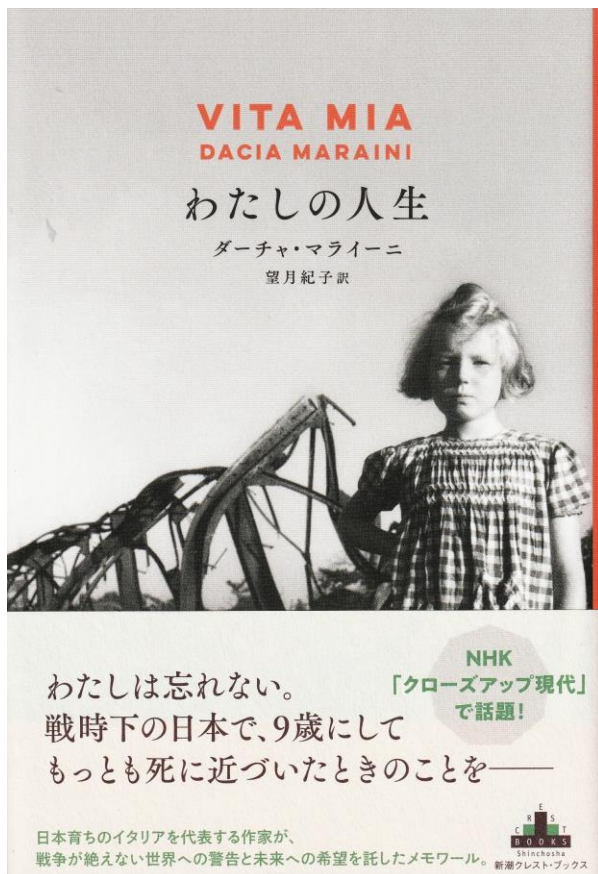
*

83年前の12月8日、太平洋戦争開戦の日、北大生・宮澤弘幸らが軍機保護法違反容疑で特高に検挙された。今年も2013年以来続けている12月8日の常圓寺に眠る宮澤弘幸墓参を右記の皆さんと一緒にいった。“戦争への道”を阻止するために、来る新年、心を新にして立ち向かって行こうと思う。（福島 清）



<参加者> ◇北大OB=伊藤セツ、伊藤陽一、泉定明、国吉昌晴、田畑保、橋本良仁、向山征哉、村瀬喜之、湯原宏、吉田万三◇毎日新聞OB=山野井孝有、大住広人、福島清◇イタリア語通訳=黒澤多佳子（敬称略）

イタリア人一家が体験した戦争の残酷 ダーチャ・マライーニ著「わたしの人生」



(2024年11月30日・新潮社刊、1950円)

そこなわれたわたしの人生／あなたは私を苦しめた／
わたしに傷を負わせた／そしていま立ち去ろうとして
いる／挨拶もなく、一歩まえに出れば／また一歩もど
る、私の人生／あなたは踊る、そして歌う／過去の瓦
礫の上で……／でも行ってしまふまえに／あなたを理
解させて／あなたを思い描かせて／あなたを抱きしめ
させて／あなたのことを話させて。

わたしは、日本と日本の強制収容所について、まちが
いなくわたしよりすぐれた書き手である両親と妹に感謝
しなくてはならない。わたしにとってこの苦しいテーマ
に直面するのは大変つらいことだった。それについてい
くつかの本で触れはしたけれど、収容されていた日々の
ことやその日々が自分の人生にどんな痕跡を残したか、
それにじっくり向きあったことはなかった。いまわたし
は、他の多くの元収容者の人たちと共有しているのが、
分かっている羞恥心や内気さを克服して、それに向きあ
わなくてはならないと感じている。

一方で、ひとは忘れられないことを忘れたいと思っ
てしまうようだ、とくにその記憶にたいする苛立ちや徒労
感、腹立たしく屈辱的だと思う感情が現に身体をめぐる
広がっていると感じるときに。

収容所での恐ろしい経験など話さないで心の片隅に閉

じこめておくほうがいいよ、秘密を守ろうとする本能が
こうさやく。それでももうひとつの声、あまり説得力はな
いけれどもっと執拗な声が、話してと急きたてる。話し
て、思い出して、証してと。

サロー共和国（罷免されたムッソリーニがガルダ湖畔
に樹立したドイツの傀儡政府）への忠誠宣誓を拒否する
選択をしたとき、両親はむろん大人の自覚にもとづく展
望をもっていた。わたしが語ることができるのは、つね
に生死の境にあったあの困難な体験をどのように生きの
びたか、それがわたしの考え方、行動のし方にどのよう
に影響したか、それだけだ。

母は監禁の最初の一年間、日記をつけて、直接の体験
を書いた。京都から持って行って、使えるだけ使った一
本の鉛筆と、最後のページまで書きつづけたボロボロ
のノート。その後、鉛筆もノートも尽きたとき、書くの
をやめた。でもそれは自分でノートに記しているように、
「衰弱、飢え、目まい、目の前に小さな黒い点々が見え
て、縫い物や記録などのささやかな気晴らしもできなくな
った」からでもあった。

父は『随筆日本—イタリア人の見た昭和の日本』や『家、
愛、宇宙』など、いくつかの著書で、母の小さなノート
をふんだんに引用して、その体験を語っている。

妹のトーニは『トパーツィア・アツリアータの芸術と
監禁の記録』という心打つ本をセツレリーリオ社から出し
た。母の日本での日記と、戦後50年たってまだ健在だっ
た母への長いインタビューを組み合わせたものだ。さら
に歴史上の時代考証とわたしたち一家の収容所生活とい
う共通の体験についての深い考察も加えている。トーニ
は一家の歴史家であり、つねに正確で几帳面で、誠実で、
歴史上の事実に通じており、この先、わたしも参考にさ
せてもらう。

*

以上は本書冒頭に書かれている序文である。7歳から9
歳まで、日本の強制収容所に収容されたダーチャ・マ
ライーニさんが自らの体験をもとに、戦争の残酷を告発し
た記録である。飢えに耐えきれず、蟻や蛇まで食べ、日
本人警官による監視と弾圧の恐怖は、幼児にとっても忘
れられない体験だった。さらに弾圧下でも両親との共同
生活を通じて学んだ出来事も詳しく書いている。

こうした自らの体験を裏付けるために、母と妹の記録
を丹念に調べ、戦争の背景などについては、先人たちの
文献から引用して、戦争と自らの体験を再確認した記録
となっている。文学者の目線で、両親の誇りと苦悩や、
弾圧する側の日本人たちの人間性、そしてイタリアに帰
国して以降の年月のことも描いている。

今年6月、来日して講演した87歳のダーチャさんを思
い浮かべながら読んだ。 (福島 清)